

森田思軒の新資料

—『十五少年』の訳稿をめぐって—

川戸道昭

森田思軒の『十五少年』の訳稿が見つかる！——などといっても、活字離れの進んだ昨今では、何それ？といった冷たい反応か返ってきそうなので、まずは、逸る気持をおさえて、そもそも森田思軒とは何をした人なのかという月並みな経歴談からはじめることにしよう。

今でこそあまり知る人もなくなったけれど、思軒という人物は、明治20年代の文学界にあっては、ジュール・ヴェルヌのSF小説やヴィクトル・ユゴーの人道主義の紹介者として、大変名前の知られた人物であった。作家としての評判も高く、「現今小説家名家一覧表」と題する当時の作家番付表を見ると、鷗外、露伴について、東3番目にその名があげられている。二葉亭は6番目で、小波は7番目だから、文壇における地位が測れるというものだ。単なる翻訳者でありながらそのような重要な位置をしめるというのは、今日のわれわれには奇異なことのように思われるが、西洋文学を手本に真の文学のあり方を模索していた当時の文学界にあっては、奇異でも何でもなく、ごく当たり前のことであった。それだけ翻訳に託された使命が大きかったということだろう。坪内逍遙などは、「外国美文学」の輸入に功績のあった人物として、鷗外、二葉亭、思軒の名をあげ、彼らを「翻訳三如来」にまつり上げているほどだ。

その思軒の翻訳の中でもとりわけよく知られているのが、ヴェルヌの『十五少年』（原題『二年間の学校休暇』）である。これは、最初、巖谷小波の編集する『少年世界』に連載されたが（明治29年3月～10月）、連載の終了とともに博文館から出版され、明治・大正・昭和と読みつがれる一大ロングセラーとなっていった。明治期に刊行された児童文学作品の翻訳で最も有名な作品は何かということになれば、すぐに、若松賤子の『小公子』とこの『十五少年』が思い浮かぶほど、明治期を代表する児童文学作品の一つとなっている。

その思軒の『十五少年』の訳稿が見つかる——ということで、いささか興奮気味にこの稿を書きはじめたわけだが、その一方で、それを記す心の内には、どこか冷めたところが無いわけではなかった。本来ならば文章末尾の感嘆符は、「！」ではなくて、「!!」という、とびきりの「びっくり記号」にしたかったのだが、そうはしなかった。その理由は、発見された訳稿が、どういうわけか、行数にして6、7行あるかないかの断片ばかりなのである。そういうものが全部で6、7片見つかった。これは一体どうしたことだろう。是非ともその謎を解き明かしてみる必要がある。

申し遅れたが、それが発見されたのは、思軒の直系の子孫である白石^{おなり}男也・静子夫妻が大切に保管してきた一千点を超える思軒関係の資料の中である。36歳の若さでこの世を去った思軒には、^{とよ}豊夫人との間に一粒種の娘下子^{しちご}がいた（思軒の没時7歳）。その下子が成人して、田山花袋の媒酌のもとに早稲田派の作家白石実三に嫁ぎ、二人の間にできた長男が男也氏であった。つまり、白石家は、近代日本の文学史上に名を残す二人の作家の血脈を継ぐ、文学と大変縁の深い家系ということになる。男也氏が平成五年に他界した後は、妻の静子氏が遺品の管理に当たり、その静子氏にお願いして今回の詳しい調査をさせていたという次第である。

だから、出所については、しっかりしている。原稿用紙には「思軒蔵版」の印刷もあるし、内容も「[武安^{フリス}『若し大陸ならむには、^ま応さに是れ] 垂米利加なるべし』。杜番^{ドクバン}『余ハ初めより、しか信ぜり、余の説果してあやまらざりき』』（第四回）というように、第何章のどの部分を訳したものであるか、明確に特定できる。したがって、真筆ということについては疑問の余地はないのだが、問題は、先ほども記したように、なぜそれが断片なのか

ということである。

可能性として考えられるのは、失敗原稿であったということである。しかし、それにしても、端がきれいにはさみで切り取られたようになっていて、丸められた痕跡がない。ところどころに朱を入れて訂正している箇所さえある。これは、何か思軒の執筆法にかかわる特別なことが隠されているにちがいない。そう思って、思軒関係の資料をいろいろ調べているうちに、その謎に迫る大変興味深い手がかりが見つかった。

それは、同じ白石家所蔵の資料の中にみつかったもので、『明治文壇回顧』の著者・馬場孤蝶が尾崎紅葉と思軒の現行の特徴について述べたこんな記述である。すなわち、紅葉も思軒もともに明治の文豪であったが、この両大家には文章にひどく凝る癖があつて、原稿を作成する際にも独自のこだわりがあつた。孤蝶によれば、紅葉は「原稿は厚くなければ駄目だ」といい、思軒は「原稿は長くなければ駄目だ」といったという。一読すると、作品の長短のことをいっているように受け取れるが、二人が問題にしているのは、作品ではなくて、あくまでも原稿用紙の厚薄、長短である。紅葉は、完成した原稿用紙を重ねたときの厚さが厚くなければ駄目だといい、思軒は、原稿用紙の長さが長くなければ駄目だといったというのだ。なんだか、謎かけ問答のようにも聞こえなくもないが、孤蝶によれば、その心はこういうことだ。

《尾崎氏は……原稿のなかの書き直す箇所へは……細い紙を丁度そこへ当るだけに切つて、其処へ糊で貼りつけ、その上へ書き直しをなし、その文章が気に入らぬと、又その上へ紙を新たに貼つて、又々書き直すといふのであつたから……『原稿は厚くなければ、駄目だ』と云つた。……森田氏の方も尾崎氏同様、原稿の部分々々を十分に書き直したのであるが、これは書直しをする時は、元のところを消して、原稿に紙を横について、それへ書き直しをするのであつた。だから、謂はば原稿紙が横に長くなる訳で、結局、文章は念を入れて書け、自分の心に満足が出来ない限りは、幾度でも直せといふことになるのだ。》

たしか、ベートーベンだったか、楽譜を訂正するのに、紅葉と同じようなやりかたをしていて、のちの研究者がある箇所の紙を一枚一枚はがしてみると、最初に書いた音符と最後に書かれた音符が同一であつたとか。何度も書き直しを重ねた結果が、結局、最初の音符へもどつたというわけだ。

思軒の場合も、文章の推敲にかけては人後に落ちない。あるとき夫人が、部屋の中をのぞいてみたら、夫が苦悩のあまり我を忘れて、「鶴啄鷺立」の体で立っていたという。漢文の第一級の遣い手といわれた思軒が、鶴や鷺のように手をあげ足をあげ、苦衷に体をくねらしていたというのだから、夫人ならずとも驚くのはあたりまえだ。

孤蝶によれば、そうした悪戦苦闘の結果できたのが思軒特有の横長の原稿であつた。これは必ずしも根拠のない伝聞とばかりはいえないだろう。その証拠に、現在、岡山県笠岡市（思軒の生地）に寄託されている原稿を見ると、ときに30行、40行にも及ぶ横長の原稿が見受けられる。とりわけ、『懐旧』（ユゴー『ビュグ・ジャルガル』の訳）の原稿などは、普通の用紙の二倍もありそうな用紙にビッシリ文字が書き込まれている。孤蝶の記述にあるように、失敗した箇所を切り取って、その横に新たな用紙を継ぎ足した跡もはっきりみとれる。

そしてもう一つ、今回新たに見つかった『十五少年』の原稿（断片）も、それを裏づける有力な証拠といえるだろう。思軒は、最初、普通の原稿と同じように細部に朱を入れてその訂正を試みたが、それでは収まりがつかかなかつたのか、その部分を切り取り、新たな稿を継ぎ足して完成稿とした。つまり、今回発見されたのは、切り取って不要になった方の原稿ということになる。本来ならばそのような断片は後世には伝わらないはずだが、幸いにして、白石家には、代々守られてきた家訓があつた。それは、「白紙の紙ならすぐに捨ててしまつてもかまわないが、そこに一字でも書いてあつたら決して捨ててはならない」というものである。静子氏は、白石家に嫁いできて最初にそれを聞いたとき、「ああ作家の

家に嫁いだのだなあ」と、しみじみ実感したという。その家訓が、思軒の未亡人豊^{とよ}から娘の下子へ、娘の下子から、孫の男也^{おなり}氏へ、男也氏から妻の静子氏へと伝わって、結果的に、同家には千数百点にも及ぶ思軒関係の資料が残った。そこに『十五少年』の訳稿断片のような貴重な資料が含まれているというのも、なんら不思議はないのである。

たとえ断片とはいえ、『十五少年』という明治期を代表する児童文学作品の原稿が発見されたことの意義は大きい。同時に、その断片が残されるに至った経緯を確認しうる付随資料が見つかったというのも見逃せない点である。明治の人びとは、押し寄せる西洋の文物を前に、その吸収・同化の方途を探るべく、試行錯誤を重ねた。それは、いってみれば、江戸以来の伝統的な美意識に感性を育まれた人びとが、西洋の美意識や考え方をもとに、新たな文化の創造を試みようとする、いわば産みの苦しみとでもいうべきものであった。白石家に伝わる資料が貴重なのは、鷗外や漱石とはまた違った、思軒という、明治 20 年代を代表する教養人の視点から、そうした吸収、同化、創造へと至るプロセスが確認できる点にある。その意味で、白石家に残された資料は、明治文化研究に新たな一石を投ずる貴重な資料といえるだろう。

今回発見された資料には、『十五少年』の訳稿のほかに、『レ・ミゼラブル』の冒頭部分の訳稿など、これまで未発見の貴重な資料が含まれており、その一部を『新資料で見る森田思軒とその交友一龍溪・蘇峰・鷗外・天心・涙香』（白石静子監修、松柏社、二〇〇五年）という書物に掲載した。興味ある方はご一読いただけたら幸いである。